

農研機構のサツマイモの新品種開発などの視察について（教員研修）

令和4年6月17日

令和4年6月15日（水）にサツマイモ栽培を担当している教諭等が、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）の中日本農業研究センター（つくば市）を訪問しました。

農研機構では、近年「あまはづき」、「ゆきこまち」などの新品種を発表しています。新品種の開発担当の田口和憲上級研究員から開発方法や基腐病対策などについて助言・指導をいただき、農業教育に活用することを目的に農研機構谷和原圃場の施設（つくばみらい市）を視察しました。

○サツマイモの新品種開発について

- ・本州の気候ではサツマイモの花は咲かないので、キダチアサガオを台木にして、開花を誘導して交配している。
- ・サツマイモは、自家不和合性が強く、同型間では受粉できない上、近交弱勢が強いいため遠縁種を交配している。
- ・新品種開発は、育種目標に沿って、「多収性」「耐病性」「糖度」などの特性と「かんしょ交配・系統ネットワーク（系統図）」をもとに、交配する品種を選定して計画を立てる。その上で、受粉試験を行って、確実に交配することを確認してから決定している。
- ・新品種は、数万粒の種からスタートし、10年以上かけて各種の検定試験をクリアして選ばれたスーパースターである。
- ・「あまはづき」は8月に収穫でき、収穫直後から甘いので、収穫してすぐに焼き芋にするイベントなどにも向いている。
- ・「ゆきこまち」は、北海道などの冷涼地域でも栽培可能で多収。生食だけでなく、加工、調理にも向くが、干し芋には不向きである。

○サツマイモ基腐病について

- ・2018年に沖縄県、鹿児島県、宮崎県に相次いで報告され、現在も南九州を中心に大きな被害が出ている。昨年、茨城県内でも発生が確認された。
- ・最も重要なことは、病原菌（糸状菌）を外から持ち込まないことである。
- ・健全な種芋や苗を使用することが必要で、生産履歴がしっかりした信頼できるところから入手することが重要である。
- ・農研機構のホームページに「サツマイモ基腐病の発生病態と防除対策」を掲載している。

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/151859.html

新品種開発などの説明を聞いているようす



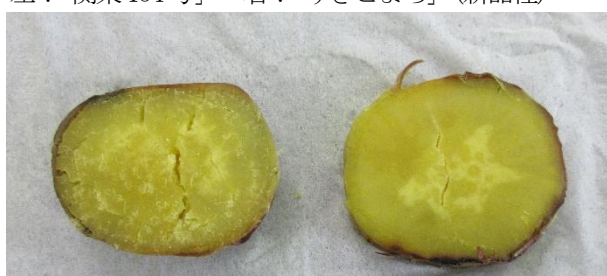
田口上級研究員



新品種「ゆきこまち」（ベニアズマの約1.4倍の収量）



左：「関東154号」 右：「ゆきこまち」（新品種）



- ・「関東154号」は、粉質系のほくほくした食感
- ・「ゆきこまち」は、なめらかな口どけで繊維質が少ない

サツマイモ苗の栽培温室（4棟）



品種別に土の中に種芋をふせて、苗を採取する



種芋の貯蔵庫



温度、湿度は人工制御していない（15～20℃、換気のみ）



プラスチック板で区分（農林1号、農林2号）



農研機構 谷和原畑圃場



サツマイモの試験圃場



田口上級研究員と撮影

